1月
2023年
みやま
第296号

病院理念
『患者さまの不安をとること』
当院の基本方針
「地域に根ざした安心できる医療」
「精神科医療の充実」
「老人医療」医療と福祉の結合

当院は コロナウィルス インフルエンザ ワクチン 接種率 9割

医療法人社団光生会　平川病院
〔ホームページ〕http://www.hirakawa.or.jp/

【左から】村田診療協力部次長、宮田副院長、平川院長、河合副院長、酒井看護部長、堀江事務部長

明けましておめでとうございます

院長　平川 淳一

令和5年になりました。ウクライナではまだロシアからの侵略戦争が続いています。昨年は30年ぶりに円安になり、物価も高騰し、海外からの医薬品の原末調達に影響が出ています。また、日医工に発する薬品製造工場の異物混入事件に端を発し、日本国内の医薬品の製造流通に支障が生じています。薬局に行ったら、今までと違う薬を渡されたという経験を持つ人が多いと思いますが、正しくこれが原因です。さらに、昨年10月に精神保健福祉法の一部改正法案が可決し、4月から施行されます。入院手続きの一部が変わったり、1年遅れですが、措置入院や市長同意による医療保護入院の場合、本人の希望があれば相談員が来るような仕組みも来年から導入され、人権により配慮された仕組みが求められます。さらに、精神科病院の不祥事が続いたことから、職員による虐待があった場合に、東京都に対して通報の義務が課せられます。当院ではそのようなことは絶対ありませんが、今一度、気を引き締めて新年を迎えようと思います。

【表紙】院長あいさつ 【P2】ネット・ゲーム嗜癖外来・専門プログラムの立ち上げに向けて 【P3】看護部の外国人材、こんなに増えました！ 【P4】発達障害事業 令和4年から5年へ 【P5】令和5年3月で、丸10年を迎えます 【P6】農地開拓の一年とこれから 【P7】災害時調理訓練 【P8】令和5年平川病院 標語

2023年4月 ネット•ゲーム嗜癖外来•専門プログラムの立ち上げに向けて

ネット・ゲーム嗜癖外来委員会　地域生活支援科デイケア　科長　井出 学

　年末・年始のお休みを、オンラインゲームやSNSに長時間費やしたという方も多いのではないでしょうか。東京都は「SNS東京ルール」というものを策定しています。＜スマホやゲームの1日の合計利用時間を決める＞＜必ずフィルタリングを付けパスワードを設定する＞＜個人情報を教えたり自撮り画像を送ったりしない＞など子ども達のゲームやネットの依存的使用、犯罪被害を予防することが趣旨です。インターネット機器が生活必需品となり、成人だけでなく中高生の大半が自分用のスマートフォンを所持する時代です。ゲーム、特にネットでつながったオンラインゲームの依存的使用は膨大な時間の使用や多額の課金、学業・就労への支障、精神状態の悪化につながることが世界的に指摘されるようになり、2019年に「GamingDisorder＝ゲーム障害（症）」としてICD-11に収載されました。

　こうした社会的要請に対応すべく、平川病院では今年4月を目標に、ゲーム嗜癖外来と専門プログラムを開始します。当院副院長で、日本アルコール・アディクション医学会理事長でもある宮田副院長を先頭に地域生活支援科、心理療法科、作業療法科、デイケアそして入院治療も視野に急性期病棟も集結し、委員会を立ち上げました。1980年代前後の電子ゲームにはまった世代のスタッフが多いのですが、PS/TPS（架空の戦場を舞台に銃や武器を使用して敵チームと戦うゲーム）、MMORPG（多人数同時参加型のオンラインロールプレイングゲーム）といった聞きなれないゲームを研究中です。オンラインゲームという仮想世界の中で対人関係を構築でき、自己効力感も得られる側面があるため、抜け出すことが難しいのがこの障害の厄介なところです。平川院長や宮田副院長はその特性を逆手にとって、メタバースの中で診察やプログラムをするような、これまでの精神科診療にはなかった発想も必要と考えています。ゲームの依存的使用が医療機関の治療対象となっていることを知らずに、本人・家族だけで問題を抱え苦悩されている方々が希望を取り戻すことができる治療を提供できればと鋭意準備中です。ゲーム嗜癖についてその特徴や診断・治療について、また当院における外来・専門プログラムについて宮田副院長から次号以降の「みやま」にて連載して頂きます。

ゲーム嗜癖外来委員会の様子

看護部の外国人材、こんなに増えました！

看護部長　酒井 科衛子

慢性的な労働力不足は先進国の多くで問題になっています。日本も少子高齢化による労働力不足は大きな社会問題であり、2060年の日本における労働人口は、2016年のときと比べると約4割減少すると言われています。そして看護師の負担軽減のために導入された看護補助体制加算で、今までは看護補助者の採用が少なかった一般救急病院も看護補助者の採用を積極的に行うようになり、看護補助者の獲得が困難になりました。これはもう10年程前の事です。

そして2022年度診療報酬改定において、看護補助体制加算がさらにアップし、その結果これからさらに看護補助者の争奪戦になるのは目に見えています。団塊の世代が75歳以上になる2025年も目前であり、要介護者の増加や医療需要の増大が見込まれます。この事態に備え、看護部は2017年から外国人看護職の採用をスタートし、今年で6年目を迎えます。中国・ベトナムでの面接や、介護福祉士専門学校在学中の支援を入れると8年に渡って外国人採用に取り組んできたことになります。その甲斐あって、現在は総勢21名（育休中2名を含む）看護師2名・介護福祉士10名・介護特定技能5名・技能実習生2名が在職しています。外国人材の採用は、病院そして看護部の中期経営計画のひとつだと思って進めてきました。長期かつ安定した雇用のためには、3〜5年計画で進める必要があります。最近は、外国人採用と育成のノウハウを教えて欲しいとの依頼も増えてきました。（実際には、今頃「確保」を考えること自体、機会損失なのでは・・・と思いますが。）

国籍・文化・教育など、様々なバックグラウンドを持つ人が集まり、ともに仕事をするようになり、職員の多様性を尊重することの重要性を肌で感じています。その人なりの育つスピードがあり、それぞれ目標も違います（スキルアップしたい・お金が大事など）。ですから「みんな違ってみんないい」という視点が欠かせません。日本人職員と同様、個別性のあるキャリア支援でひとり一人の職員の特徴や強みをしっかり把握し、職員が定着・活躍できる職場にしたいと思います。そして人材確保も人材育成も、5年・10年の歳月を要し、今更ながら誠実に毎日を積み重ねてきたことが、20年・30年後の成果に結びつくと改めて実感しています。また、これまで外国人職員を支えてくれた職員は、苦労も多かったと思いますが本当に頑張ってくれました。感謝です！今後は外国人の先輩が後輩を指導する流れを確立し、もっと充実した育成環境にしたいと思っています。これからもよろしくお願いします。

ゲーム嗜癖外来委員会の様子

発達障害事業　令和4年から5年へ

地域生活支援科　科長　ソーシャルワーカー　石橋 さおり

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

発達障害事業について、外来・デイケア・地域活動にわけて、それぞれの振り返りと、最後に今年の抱負をお伝えしたいと思います。

発達障害専門外来は昨年も盛況で、世の中の関心の高さを感じています。昨年は新たな取り組みとして、受診の際にご用意いただく問診票を紙面からWEBに変更しました。始める当初は、入力方法に関する問い合わせなど混乱も予想しましたが、思いのほか皆さんスムーズに回答いただき、時代は変わっているなと実感しました。また、外来予約の案内も当院ホームページのBLOGを活用し始めています。

デイケアの発達障害専門プログラムでは、卒業されたメンバーは障害者雇用による事務補助や軽作業などの仕事に就職する方、就労移行支援事業所にステップアップする方、復職・復学される方など、それぞれの道に進まれています。また、専門プログラムのグループの中にいきなり参加することが大変な方もいるため、「発達理解」というプログラムを新設し、カードゲームなど行いながら集団に慣れていただき、自閉症スペクトラム障害の特性についての学習など行っています。

地域活動としては、渡部先生が「わかくさ家族の会」や保健所主催の「思春期の問題を抱える家族グループ」で発達障害について講演、そして現在発達障害支援のポータルサイトを準備中です。子どもから成人までの切れ目ない障害に関する情報や福祉サービスについて、当事者の方やご家族、支援者が利用できるサイトを目指しています。準備の中で、初めてやりとりする福祉事業所から「これを機に連携したい」との要望や、サイトの主旨への賛同、「成人の発達障害については平川病院と周知されてきてます」などの声をいただき、こちらが元気をいただくこともありました。

今年の抱負ですが、担当者の中ではいろいろな意見が出ています。ADHDの方を対象としたプログラムの新設、就労していて平日のデイケアに来れない方の支援、専門プログラム卒業後のアフターフォロー、コロナ禍で中断している家族会等々、これまでの経験から見えてきた役立つ支援を考えていきたいと思っています。

発達障害事業担当者です。今年もよろしくお願いします

令和5年3月で、丸10年を迎えます

南多摩医療認知症疾患医療センター　センター長代理　椎名 貴恵

当院では、東京都の指定を受け認知症疾患医療センター（以下、疾患センター）を運営しています。東京都で疾患センターの事業が開始された平成24年4月からですので、今年度末で丸10年になります。当時は島しょ部を除いた12か所の地域に1か所ずつ設置され、当院は南多摩医療圏という5つの市（八王子市、日野市、多摩市、稲城市、町田市）を担当していました。その後、東京都では各区市町村に1か所ずつ（檜原村を除く）、地域連携型疾患センターを設置し、当院は、八王子市の地域連携型疾患センターとして、また、従来の担当の南多摩医療圏の地域拠点型疾患センターとして運営を続けてきました。

これまでを振り返ると、運営を開始した当初は【認知症＝介護保険】と思い込んでおり、精神科病院の私たちにどのようなことができるのだろうか？と不安に思うこともありました。しかし、認知症の方の支援は、医療面での支援とそれ以上に生活支援が重要であること、また、認知症と診断されたご本人と共にご家族の支援が大切であることがあらためてわかり、これらのことは、当院が長年行ってきた精神障害者の支援と共通していると思うようになりました。当院が培ってきたことを認知症のご本人とご家族の支援に、また、地域づくりに生かしていけるのではないかと思っています。

その試みの一つとして、令和2年から地域生活支援科、作業療法科と協働し介護保険のサービスの利用にスムーズに繋げるための前段階として、また、介護度が軽く、介護保険サービスだけではサービスが不足する方等の外来の作業療法利用の検討を始めています。その経緯としては、当院の認知症外来を受診される方々で、認知症と診断されても軽度の高齢の方が増えてきていることにあります。認知症の啓発活動が市民の方に浸透し、早めに検査を受けてみようと思う方が増えてきているように思います。

認知症の方の外来であっても、入院であっても、それぞれの部署の方々のしっかりとした対応あってこその、疾患センターの運営だと思っています。外部の関係機関との連携のみならず、院内での連携もより深めていきたいと思っています。

2022年11月3日 八王子市、ケアラーズカフェわたぼうし、当センターの共催で行った【eまちサミット】で飾られた「おれんじの木」～介護者の方からいただいた言葉～

農地開拓の一年とこれから

作業療法科　科長　土屋 貴裕

昨年7月号の『みやま』の巻頭にて院長先生よりご紹介がありましたが、昨年6月より、当院近隣の土地で農耕作業が始まりました。とはいっても、すぐに野菜が育てられたわけではなく、その土地は近隣の方や勤務歴の長い職員から伺ったところ20年近く手付かずの土地であったようですし、病院敷地内に畑があったころに在籍していたOT科の職員はすでに退職していたため私たちに農耕のノウハウもなく、本当にゼロからのスタートでした。幸い、和田元事務部長に農耕のプロをご紹介いただき、その方にご指導いただけることになりました。

作業は6月上旬から、まずは土地の草刈りと石拾いからはじまりました。施設係とOT科だけでは到底終えられない広大な土地のため、事務部、診療協力部各科にもご協力いただきました。

草刈りが終わると次は土壌作りです。所謂“土が痩せている”状況であったため、近隣の三神牧場さんから堆肥を購入させていただき、土壌改良を行いました。合計6トンもの堆肥をトラックで搬入していただき、降ろしてもらった堆肥をスコップやトンボで土地全体に広げる作業の繰り返し…。日差しが強く、また、発酵した堆肥からの湯気もあり汗だくになりながらの作業でした。

これらの作業を行いつつ、農機具の買い出しや、動物（サルやイノシシ）対策の柵の設置、畑に植える品種を決め、畝作りを終え（そうこうしているとまた雑草が生えてくるのでみんなで何度も草取りを…）、7月中旬にようやく種まきにたどり着きました。

昨年は初回ということで、この土地で育ちやすい野菜、そうでない野菜を確かめるために夏物、冬物合わせて15品目を栽培しました。葉物は残念ながら虫による被害が多かったですが、大半が立派に育ち、初年度としては大成功だったのではと思っています。

すでに今年の計画が動き出しておりますが、せっかくの畑なので、患者様にも土に触れる機会を提供できればとの想いはあります。患者様、職員、職員のご家族、地域の方、みんなで収穫祭ができればなぁ、なんてことも考えております。

畑の様子はブログにもアップしていきますので、そちらも覗いていただければと思います。

作業開始当初（R4.6.8）

畑で採れた野菜

災害時調理訓練

平川病院は
東京都災害拠点精神科連携病院に
指定されています。

災害対策委員会　栄養科　主任　管理栄養士　田中 康之

災害時調理訓練とは

今回、災害対策委員会では、災害時にも「温かい食事を出したい」「地域の方々にも提供出来れば」という平川院長先生の想いのもと導入していただきました【移動式煮炊釜】を使用した訓練です。

機能として移動がスムーズに行えるようにノーパンクタイヤやハンドルがついており、薪や炭を使用して使うことも出来ます。一般的な汁物なら約500食分を作る調理能力があり、今回は豚汁を作りました。

非常時用備蓄倉庫からの移動・セッティング・調理など、実際の炊き出しを想定した訓練では、大きなトラブルもなく終えることが出来ました。今回の経験を活かし様々なシーンでも扱えるよう定期的に行っていきます。

訓練の様子(当院のブログもチェックして見て下さい)

平川院長：写真中央

災害対策委員会とは

平川病院災害対策委員会は「想定される災害の見える化・共有」「想定される災害への対策の立案・準備」「災害対策(防災意識)の普及啓発」を活動指針としています。

令和5年 標語

当院では毎年、全職員から「標語」を募り、最優秀作に選ばれた標語は、その年の病院標語として採用されます。今年の受賞作を紹介します。

優秀賞 受賞者 9名　〈敬称略〉

自分の家族を任せたいと思える病院
医療相談科　市川 佳奈

日々のコミュニケーションを大切に、患者様へより良い医療の提供を
栄養科　遠藤 優

みんなから選ばれる魅力ある病院づくり
リハビリテーション科　奥出 聡

どんな時でも　笑顔で乗り越える仲間がいる平川病院
リハビリテーション科　亀田 美代子

いいことがある　ますますよくなる　きっとよくなる　かならずよくなる
南3病棟　師長　髙木 路子

患者の苦しみをスタッフの愛で満たす
東4病棟　ヴォ ティ ミー ヒエップ

心動かす寄り添える医療
南2病棟　主任　丸山 千裕

心をつなぎ、広げよう笑顔の輪
南2病棟　木村 拓也

ご利用者の長い人生の大切なときに寄り添いながら
お一人お一人の暮らしを創り、生活を支えるサービスの提供
南3病棟　チャン ティ フォン

編集後記

2023年が始まりました。今年のトレンド予測は、物価高続く中、キーワードはやはり節約（節電、省エネ家電、買い控え）…。ヒットしそうな商品やサービスのキーワードは「攻めの安近短」。安近短とは「費用が安く、距離が近く、日程が短い」旅行や行楽の傾向をさすものですが、特に安いと手軽さは重要なポイントのようです。予測がし難いご時世ですが、せめて気持ちは前向きに抱こうかと…今年はいい年になることを期待しましょう。

医療法人社団光生会 平川病院
東京都八王子市美山町１０７６
電 話 ０４２−６５１−３１３１
FAX ０４２−６５１−３１３３
編集　平川病院　広報委員会
ご意見ご感想はこちらへお願いします
kouhou@hhsp1966.jp

HIRAKAWA HOSPITAL